

アリストテレス『詩学』における〈μῦθος〉

— 〈μῦθος〉の語義とその歴史的変遷からの考察

小川 彩子

1. 序——本稿の導入として、アリストテレスの『詩学』における〈μῦθος〉——

アリストテレスの『詩学』では、度々、〈μῦθος〉という語が用いられている。この語は、一般的に、「神話」「伝説」などの意味を指し示す語であると考えられるが、『詩学』において用いられている〈μῦθος〉という語は、これらの意味をさらに深めた、彼独自の概念を示しているものであると捉えられる。というのは、『詩学』で問われている〈μῦθος〉は、「出来事の組み立て」(ἐν συνθεσί τοῦ ποιήματος)であると説明されているからである(1450a4-5)。「出来事の組み立て」とは、作品としての詩作のいわば「構造」のことである。さらに「出来事の組み立て」を意味する〈μῦθος〉は、詩作の代表たる悲劇の「目的」(τέλος)であり(1450a22-23)、「原理」(ἀρχή)でもあると言及されている(1450a38-39)。このような意味で論じられる〈μῦθος〉は、単なる「神話」「伝説」などとは捉えられないだろう。また、『詩学』における〈μῦθος〉は、大概の場合、Plot「筋」などの

特殊な訳語で示されている¹⁾。

一般的に見て、〈μῦθος〉は「神話」「伝説」などと解されるだろうが、『詩学』においてはその〈μῦθος〉という語が詩作の「構造」をも意味している。実際、アリストテレスは「行為の再現とは〈μῦθος〉のことである」というのは、ここで私の言う〈μῦθος〉は出来事の組み立てのことであるから (ἐστὶν δὲ τῆς λέως πράξεως ὁ μῦθος ἡ μίμησις, λέγει γὰρ μῦθον τοῦτον τὴν σύνθεσιν τῶν πραγμάτων) (1450a3-5) と述べているのである。一般的に「神話」「伝説」などを意味する言葉が、特別な説明なしに詩作の「構造」をも意味することは、我々にとって疑問であろう。しかし、アリストテレスにとっては「神話」「伝説」などと「出来事の組み立て」とは同じ〈μῦθος〉という語によって、疑問なく、示し得たのである。だが、我々にとって「神話」「伝説」などと「出来事の組み立て」とは、性質上かなり異なったものであると見受けられる。このことが、『詩学』において〈μῦθος〉理解を複雑なものにさせていると考えられるのである。事実、これまでの『詩学』研究において〈μῦθος〉は、一方では先の「Plot」「筋」などの訳語にも示されている通り、詩作の「構造」や「形式」として捉えられてきたが、他方では悲劇の題材たる「神話」「伝説」などに端を発するような「物語」として、詩作の「主題」や「内容」とも捉えられてきた。また、双方を統合した形で、詩作の「形式における内容」とも考えられている²⁾。

テクスト内在的な解釈によるこれまでの『詩学』研究からも明らかのように、詩作における〈μῦθος〉は、単純に「形式」とも「内容」とも「形式における内容」とも一言では語り尽くし得ない、複雑さと曖昧さとを有している言葉である。そして、この語が複雑で曖昧なものであると感じさせる要因は、〈μῦθος〉という語がそもそも「神話」「伝説」などととともに「出来事の組み立て」をも意味し得る、適応範囲の広い言葉であることに存すると考えられる。実際、〈μῦθος〉の意味するところは幅広く、言うことから出発して、言葉、話、弁、物語、作

り話、架空の話、と虚構の意味を有するものや、神話、伝説、寓話、などの象徴的な話、噂、目的、意図、考え、企み、などにも適用可能な語であると、辞典の上では捉えられる。したがって、本稿では、〈μῦθος〉の語義とその歴史の変遷とを考察することによって、歴史的に〈μῦθος〉という語の意味を明らかにし、それを踏まえた上で、アリストテレスが『詩学』において使用する〈μῦθος〉という語をどう捉えるべきであるか提示する。

2. 〈μῦθος〉の語義とその歴史の変遷

以下に、〈μῦθος〉の語義を、おおまかにではあるが、歴史的な順を追って見てゆきたい。

〈μῦθος〉という語がいつ頃から用いられていたのかは定かでないが、ホメロスの『イリアス』『オデュッセイア』においては、〈μῦθος〉という語を数多く見出すことが出来る。このとき、〈μῦθος〉という語は〈εἶπος〉という語と並列で用いられるように、ただ情報伝達の意味で〈語られたもの〉〈聞かれたもの〉として^③、漠然とした「話」や「言葉」を意味するだけであった^④。つまり、〈μῦθος〉の内容に関して虚実の区別が必要とされたり、事実関係が問題とされたりすることはなかった。〈μῦθος〉は、漠然とした、いわゆる「話」「言葉」を意味していた。

ただし、ホメロスにおいて〈μῦθος〉という語が用いられる場面は限定されている。例えば、〈μῦθος〉という語は、独自の意見、特別な要件、忠告、助言、命令、意見に対する答え、非難、叱責、などを示す際に用いられた語であると解することが出来る^⑤。振り返って見るならば、これら〈μῦθος〉の語られ方は、どれもみな特別な語り口のものである。どの〈μῦθος〉もみな、何らかの意味で上の者から下の者へと教示的に語られるようなものである。換言すれば、これらの〈μῦθος〉は、ある情報に関して知る者から知らぬ者へと教示的に開示の意味

で語られるようなものである。したがって、〈μῦθος〉は情報伝達という面において何らかの有意義なものを示す。つまり、〈μῦθος〉は単なる無駄な〈お喋り〉や、そうした〈お喋り〉によって〈語られたもの〉を指示するわけではない。

また、歴史家であるヘロドトスやトゥキユディデスは〈伝統的な物語〉としての〈μῦθος〉を、歴史家にとつては不確かな物語であり、事実ではないかもしれぬものとして捉えている。例えば、ヘロドトスは、「ギリシア人たちは色々と多くのことどもを軽率に語るが、ヘラクレスに関して彼らの語る〈μῦθος〉は愚かしいものである。即ち、ヘラクレスがエジプトへ行った時、エジプト人たちは彼をゼウスへの犠牲にしようとして引き立てるよう命じたというのだ。(λέγουσι δὲ τοῖσιν καὶ ἄλλα ἀνερκετέρας οἱ Ἑλλήνες, εὐθὺς δὲ αὐτὸν καὶ ὅτε ὁ μῦθος ἐστὶ τὸν περὶ τοῦ Ἡρακλείου λέγουσι, ὡς αὐτὸν ἀντικείμενον ἐς Αἴγυπτον στέφαντες οἱ Αἴγυπτιοὶ ὑπὸ κομῆτις ἐστῆνον ὡς θύοντες τῷ Διὶ.)」(Hdt. 2.45.1-5) というように、ヘラクレスに関する〈μῦθος〉は〈愚かしいもの〉(εὐθὺς)であると言及しているのである⁶⁾。また、トゥキユディデスは『戦史』の中で、自らの歴史的な記録からは伝説的な(μυθώδης)要素を排除する旨を述べているのである⁷⁾。

しかし、彼ら歴史家の捉えた〈μῦθος〉もまた、決して等閑にしてよい内容を指示していたわけではない。彼らの想定した〈μῦθος〉はヘラクレスにまつわる話など、世界の起源や神々を語るような、決して無駄なものではない、有意義な内容のものである。歴史家により〈愚かしいもの〉として〈史実〉や〈歴史的報告〉からは区別されたにもかかわらず、〈史実〉や〈歴史的報告〉が語り得ない有意義な内容を示すからこそ、ヘラクレスにまつわる〈μῦθος〉はギリシア人たちによって語り伝えられたのである。もちろん、これらの〈μῦθος〉もまた、決して単なる〈お喋り〉として軽んじられる類いの〈語られたもの〉ではないだろう。

プラトンも、まさにこの流れを引き継ぎ、『国家』において、ホメロスやヘシオドスらの詩を含む、神々や高

貴な対象を描写した〈伝統的な物語〉としての〈μῦθος〉を、教育の初段階において有意義なものとした上で、それを言論の上での〈μῦθος〉なもの、すなわち、嘘の、偽りの、虚偽のものと捉えるのである。即ち、以下のように語るのである。

λόγων δὲ διττὸν εἶδος, τὸ μὲν ἀληθές, ψεύδος δ' ἕτερον;
Ναί.

Παιδευτέον δ' ἐν ἀμφοτέροις, πρότερον δ' ἐν τοῖς ψευδέσιν;

Ὁὐ μανθάτω, ἔφη, πῶς λέγεις.

Ὁὐ μανθάσεις, ἦν δ' ἐγώ, ὅτι πρῶτον τοῖς παιδαῖσι μῦθους λέγομεν; τούτο δέ που ὡς τὸ ὄλον εἶρεῖν ψεύδος, ἐν δὲ καὶ ἀληθῆ. πρότερον δὲ μῦθοις πρὸς τὰ παιδία ἢ γυμνασίοις χρῆμεθα.

Ἔστι τὰντα. (R.376E11-377A8)

「話(λόγος)には二種類あって、一つは真実のもの、もう一つは偽りのものではないかね」
「は」

「その両方によって教育されるべきであるが、偽りのものによる教育の方を先にするべきではないかね」

「何をおっしゃっているのか、わかりません」と彼は言った。

「きみにはわからないのかね」と私は言った、「我々は子供たちに、最初は諸々の〈μῦθος〉を話して聞かせるではないか。これはおそらく、全体として偽りを語っているものだ。真実も確かに含まれてはいるが。そして我々は子供たちに対して、体育よりも先に諸々の〈μῦθος〉を用いるのだ」

「その通りです」

プラトンにおいて、〈αἰθερόν〉は、〈愚かしいもの〉であるばかりか、明らかに虚偽を意味するようになる。しかし、ここでプラトンの言う 〈ψευδής〉な 〈αἰθερόν〉とは、真偽の点における 〈偽り〉を示すだけにとどまらず、教育目的で人が作った 〈作りごと〉の、〈虚構〉の「神話」や「物語」であるという意味での 〈ψευδής〉をも同時に意味する。つまり、ただ単に真偽に関して偽であるのみならず、制作性をも含んでの 〈ψευδής〉なのである。

以上のように、歴史を追って 〈αἰθερόν〉の語義を見てゆくと、〈αἰθερόν〉の語義には三つの特徴が見出せる。第一に、〈αἰθερόν〉という語は「虚構性を示す傾向」を有するということである。ホメロスからはじまりプラトンに至るまで見てきたが、〈αἰθερόν〉という語は明らかにホメロスにおいては有していない虚構性を、プラトンにおいて呈示するのである。その虚構性とは 〈ψευδής〉と言われるように、事実に対する 〈嘘〉〈偽り〉であり、それと同時に、人の手による 〈作りごと〉として、制作性へと向かう虚構性である。

しかしながら、第二に、〈αἰθερόν〉という語は、常に「有意義な内容」を有するのである。ホメロスからプラトンにかけて、〈αἰθερόν〉という語の虚構性を示す傾向は強調されていったが、その間常に 〈αἰθερόν〉は有意義な内容を指示した。ホメロスにおいては、説教や説得、特別な要件など、情報伝達の面で有意義なものを 〈αἰθερόν〉が指示し、歴史家においては、〈史実〉などに示される論理的説明によってあらわしきれないが有意義な内容が 〈αἰθερόν〉で示された。また、プラトンにおいては教育目的を果たす有意義なものとして 〈αἰθερόν〉が示される。さらに、プラトンは自らの哲学においても 〈αἰθερόν〉を効果的に用いるが、この時 〈αἰθερόν〉の有意義な内容を示す特徴は強調されると考えられる。いずれにせよ、〈αἰθερόν〉という言葉によって示されるものは、単なる 〈お喋

り〜のようなものではないのである。

第三に、〈ἐπιθεῖν〉は有意義な内容を示すことに即して、「教示的な語り口」で語られるということである。ホメロスや歴史家においては情報伝達という意味で〈ἐπιθεῖν〉が教示的に語られ、プラトンにおいては教育目的で教示的に語られた。また、プラトンの対話篇では、独白に似た形で〈ἐπιθεῖν〉が教示的に呈示される。〈ἐπιθεῖν〉は、聞き手と語り手とが入れ代わったり、多数の人間で織り成したりするような「話」ではない。聞き手に対して語り手が一方的に教示的に語り聞かせる形態のものである。〈ἐπιθεῖν〉は、語り手と聞き手との間に能動受動の関係が見受けられるような「話」なのである。

3. プラトンにおける〈ἐπιθεῖν〉

このように、〈ἐπιθεῖν〉という語は、「虚構性への傾向」、「有意義な内容」、「教示的な語り口」、という三つの特徴を有する語である。また、これら三つの特徴は、プラトンが用いる〈ἐπιθεῖν〉という語において、集約的に且つ特徴的にあらわれると言える。

まず、教育の初段階において用いられる〈ἐπιθεῖν〉には、人の手によって作られることが前提とされているという点において「虚構性への傾向」が強く示されている。また、〈ἐπιθεῖν〉な〈ἐπιθεῖν〉は、「国家」において様々な局面で「有意義なもの」として描かれている。〈ἐπιθεῖν〉な〈ἐπιθεῖν〉は、教育の初段階において有効なものであり、また無知な人間にとっていわば「薬」のようなものとして役立つことがありうるのだと言及されているのである³⁾。例えば、守護者たちが「知識」を身につけているのだとすれば、あたかも医者の方方する「薬」のごとく〈ἐπιθεῖν〉な〈ἐπιθεῖν〉を用いることで、知識を備えていない被支配者たちに対して「真なるドクサ

「*zánthēg sōgā*」をもたらすことも可能なのである。専門家が用いる *ἀπειρήγ* な *ἀριθμός* は、計算尽くの嘘によって人間の心を毒すようなものとは異なる。プラトンにおいて *ἀριθμός* は、単に *ἀπειρήγ* なものだからといって排除されるようなものではなく、「有意義なもの」として捉えられている。

さらに、プラトンは自らの哲学を構成する部分としても *ἀριθμός* を効果的に用いるが、このような *ἀριθμός* にも、その語義が有する特徴が強くあらわれている。

プラトンの哲学は主として他者との理論的説明的な対話によって展開されることから、*ἀπολογία* の重要性は強調されるだろう。それにもかかわらず、プラトンは対話において *ἀπολογία* を散々重ねて語った後、あえて *ἀριθμός* を語り、対話をしめるのである。このとき語られる *ἀριθμός* は、決して単に *ἀπειρήγ* な *ἀριθμός* の言論として扱われているわけではない。だが、*ἀριθμός* の語義変遷を辿っても明らか通り、*ἀριθμός* が不確実なもの、論証し難いものとして扱われていることには変わりない。さらに、確実な *ἀπολογία* を積み重ねた後で、いわば論証し難い *ἀριθμός* をあえて語るからには、*ἀριθμός* には相応の語られるべき意義があるのだと考えられる。ここで語られる *ἀριθμός* は、単なる *ἀριθμός* としてあえて作られて語られるものではないにせよ、*ἀπολογία* の後であえて語られるものとして、やはり何らかの面で「有意義なもの」としてあえて語られているのである。*ἀπολογία* と対比的に見るならば、ここで用いられる *ἀριθμός* もまた、*ἀριθμός* の語義的な特徴を示していると言える。

プラトンの語る *ἀριθμός* は重要なものとして様々に扱われる。例えば、『メノン』における *ἀριθμός* は、真なる知識が想起によってのみ達成され得るとする議論をいわば補足するために用いられ、『ゴルギアス』では、真実に近似的だと考えられる死後の世界が *ἀριθμός* によって説明されている。また、『パイドン』では以下のよう語られる。「だが、魂が確かに不死なるものとしてあることは明らかなのであるから、我々の魂とその住処

に関して何かこのようなことがあると考えることは適切であるし、そのように考えて危険をおかすことは価値を有していると私には思われるのだ (οὐ μὲντοι ἢ ταῦτ' ἐστιν ἢ τοιαῦτ' ἀτὰρ περὶ τὰς ψυχὰς ἡμῶν καὶ τὰς οἰκτιροῦσ. ἐπιτέροι ἀθάρτων γε ἢ ψυχῆ φαίνεται οὐσα, τοῦτο καὶ κρῆναι μοι δοκεῖ καὶ ἀξιον κινδυνεύσαι οἰομένω οὐτως ἐξεῖν) (114D2-6)。このような話を、確信をもって主張することは、理性を有する人にはふさわしくない。しかし、このような考えを信じることに価値がある。プラトンにとって〈μῦθος〉は信じるべきものであったのである(9)。

以上のように、プラトンの哲学を支えるところの〈μῦθος〉は、危険をおかしてでも信じるべき美しきものとして、あえて語られる価値を有した。しかし、このような〈μῦθος〉はあくまでも真理を類推させることの可能な物語であり、〈λόγος〉の有する論理性から生じる論証可能な真実には到達し得ないのである。だが、〈μῦθος〉は真実そのものをあらわすものではないにせよ、少なくとも真実を類推させ、諸表象を例に真実を示唆することを可能にするものではある。〈μῦθος〉によって語られることは、決して出鱈目の絵空事でしかありえない、という意味において神話物語的なものではない。プラトンにおいて、〈μῦθος〉は信じられるべき価値を有している、極めて「有意義なもの」なのである。

さらに加えて言うならば、プラトンにおける〈μῦθος〉は、その呈示の仕方に関しても〈μῦθος〉の語義が有する特徴を十分にあらわしている。〈μυστικόν〉な〈μῦθος〉もプラトンが語る〈μῦθος〉も、どちらもある意図や意味を効果的に伝えるためにあえて語られるものである。〈μυστικόν〉な〈μῦθος〉は教育的な意図によって、もしくは無知な人間へのいわば薬としてあえて語られたが、他方でプラトンがその哲学において用いる〈μῦθος〉も、確実な〈λόγος〉を対話によって積み重ねた後に、あえてその対話を取りやめた上で語られた。〈μῦθος〉が意図をもってあえて語られるとき、それは対話形式ではなく、一方的に、「教示的な語り口」で呈示される。

以上のように、プラトンにおいて特徴的に用いられるこれらの $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ という語には、全体として $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ の語義が有する特徴が強くあらわれているのである。特に、『国家』において語られる $\langle \mu\epsilon\upsilon\delta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ な $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ は「虚構性への傾向」、「有意義な内容」、「教示的な語り口」の三点が、特徴的にあらわれている。また、プラトンがその哲学において効果的に用いる $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ には、信じるべき価値があるとみなされるほどに強く、「有意義な内容」を示す特徴があらわれている。沢山の $\langle \lambda\omicron\lambda\omicron\sigma\lambda\omicron\sigma\varsigma \rangle$ を重ねた後にあえて不確かだ論証し難い $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ を語るといふことには、よほどの語る意義があるのだと捉えてよいだろう。何となれば、無根拠な $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ を最後に語るといふことは、それまでにつちかつてきたことどもを無意味にしかねないからである。さらに、 $\langle \lambda\omicron\lambda\omicron\sigma\lambda\omicron\sigma\varsigma \rangle$ を重ねた後に語られる $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ が、ある程度の長さをもつたいわば独白で語られることにも、「教示的な語り口」という特徴がよくあらわれていると考えられる。

4. アリストテレスの $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$

先述の通り、アリストテレスが『詩学』において論じている $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ は、「神話」「伝説」とは訳し難いようなものであり、それは例えば「物語」と訳したとしても、十分であるとは言えない難い概念である。『詩学』における $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ という言葉は、それ以外の場合で語られる $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ という語とは異なり、より特殊な、より特別な意味を有する語であると考えられる。そして、『詩学』でのいわば特殊な意味の $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ という語には、プラトンが特別な意味で用いた、 $\langle \mu\epsilon\upsilon\delta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ な $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ と、その哲学において効果的に語った $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ とが意識されていると考えられる。というのは、アリストテレスが『詩学』において用いた $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ という語にもまた、プラトン同様に、 $\langle \mu\theta\omicron\sigma\varsigma \rangle$ の語義が特徴的に鋭くあらわれているからである。したがって、このことから、プラトン

の〈μῦθος〉を踏まえて、『詩学』において中心的に議論されている〈μῦθος〉があらわされていると考えられる。そのことを確認するためにも、実際に『詩学』における〈μῦθος〉が、どのような意味の言葉であり、どのような概念として語られているのか、語義の特徴に鑑みて、見直してゆきたい。

『詩学』は、如何に詩作をなすべきかを論じたものである。詩作を論じる場面において語られる〈μῦθος〉とは、もちろん悲劇を代表とする詩作の〈μῦθος〉であり、悲劇の制作者である詩人は、韻律も然ることながら、この〈μῦθος〉を制作しなければならぬとされている(1451b27-28)。〈μῦθος〉の語義において、「虚構性」という特徴が見られたが、『詩学』において論じられている〈μῦθος〉は、詩人によって〈作られたもの〉として前提されている。ここへ至って、アリストテレスが詩作を論じる場面で〈μῦθος〉という語を用いることによって、〈μῦθος〉の語義が有する「虚構性への傾向」は、いよいよ制作的な意味の強調される特殊なものとなる。

先に論じたが、プラトンにおいて〈μῦθος〉は〈μῦθος〉なもの、それも人の手によって〈作られたもの〉としても語られた。アリストテレスにおいて〈μῦθος〉という言葉が、人の手によって〈作られたもの〉として理解されていたのは、まさにプラトンのこの〈μῦθος〉な〈μῦθος〉が念頭にあったからではないだろうか。だからこそ、制作的な事柄に関して論じる場面において、詩人が作るべきものが、この〈μῦθος〉という語によって示されたのである。

さらに、詩人は〈μῦθος〉を制作することによって、単なる出来事の羅列をするのではなくて、それ以上に、何か詩作としての意義があるものを作り上げなくてはならない。ありのままを語るといふことは、むしろ、歴史家の仕事に属する。というのは、歴史家は既に起こったことを語るものだとされているからである(1451a37-1451b5)。それに対して、詩人の仕事は、これから起こりうることを、蓋然性ないし必然性にしたがった可能性のあることを語ることである(1451a37-38)。さらに、歴史家は既に起こったことを語り、詩人は起こる可能性の

あることを語るといふ点から、「そのために、詩作は歴史に比べて、より哲学的であり、より優れたものである。というのは、一方で詩作はむしろ一般的であるが、他方で歴史は個別的に語るからである (ὅτι καὶ φιλοσοφώτερον καὶ οὐδυνώτερον κοινῆς ἰστορίας ἐστὶν ἢ μὲν γὰρ κοινῆς μάλλον τὰ καθόλου, ἢ δ' ἰστορία τὰ καθ' ἑκάστου λέγει.)」(1451b5-7)とも言われている。悲劇に関して言うならば、我々の周りにも起こりうる可能性のある、一般的普遍的なことを語るからこそ、我々は恐れや哀れみを感じ、悲劇固有の快を得ることが出来るのである。個別的な事実ありのままを語るだけでは、悲劇の効果は得られない。詩人が制作すべき $\langle \mu\upsilon\theta\omicron\varsigma \rangle$ には、このような面で、事実そのままを語るよりも「有意義な内容」があるのである。プラトンの $\langle \mu\upsilon\theta\omicron\varsigma \rangle$ と同じく、『詩学』における $\langle \mu\upsilon\theta\omicron\varsigma \rangle$ にもまた、 $\langle \mu\upsilon\theta\omicron\varsigma \rangle$ の語義が示す「有意義な内容」という特徴があらわれていると言えよう。

さらに、詩作の $\langle \mu\upsilon\theta\omicron\varsigma \rangle$ は、語り口の面においてもまた、プラトン同様、聞き手に対して「教示的な語り口」で呈示される。詩作における $\langle \mu\upsilon\theta\omicron\varsigma \rangle$ の呈示の仕方が、語ることであつても構わないだろう¹⁰。その上で、詩作の $\langle \mu\upsilon\theta\omicron\varsigma \rangle$ には、それにふさわしい語り方があるわけである。というのは、例えば、詩作の代表たる悲劇の $\langle \mu\upsilon\theta\omicron\varsigma \rangle$ には緊密な統一が必要であり、同じ出来事を呈示するにしても、どのような呈示の仕方もしくは順序で表現するかによつて、統一性のあるなしは大きく異なつてくるからである。また、恐れや哀れみを引き起こすような出来事は、予期に反して、しかも因果関係によつて起こる場合に、最も効果をあげるとされ、このようにして出来事が生じる場合の方が、ひとりで起こったり、偶然に起こったりする場合よりも、驚きがいっそう大きいとも言われている (1452a1)。因果関係をもつて語るからこそ、人々の心を動かすことも可能なのであり、詩作の $\langle \mu\upsilon\theta\omicron\varsigma \rangle$ としての意義は生まれてくる。そして、詩人は聞き手に驚きを感じさせるために、出来事の因果関係を教示するように語らなければならない。このとき $\langle \mu\upsilon\theta\omicron\varsigma \rangle$ は、やはり対話形式ではなく、教示的に語

られる¹¹⁾。『詩学』における〈μῦθος〉にも、「教示的な語り口」という特徴があらわれている。

以上のように、アリストテレスが『詩学』において中心的に議論している〈μῦθος〉概念には、〈μῦθος〉という語が有する三つの特徴が鋭く強調されている。それはプラトンにおける〈μῦθος〉が、〈μῦθος〉という語が有する三つの特徴を強く示すものであり、アリストテレスはこのようにプラトンが用いる〈μῦθος〉という語の外延をそのまま受け継いでいると考えられるからである。〈μῦθος〉の語義を見てゆくと、アリストテレスが〈μῦθος〉という言葉を用いるときには、やはりプラトンの〈μῦθος〉が思い起こされたのだと捉えられるのである。

さらに、アリストテレスはプラトンの用いた〈μῦθος〉という言葉の外延を受け継ぐだけにとどまらず、詩作を論じる場面で用いることによって、語義の特徴を先鋭化したとも考えられる。アリストテレスが詩作を論じる場面で〈μῦθος〉という語を用いることによって、〈μῦθος〉という語の示す虚構性は決定的に人の手によって作られたもの¹²⁾を意味するようになる。また、制作的な意味を示すものとして〈μῦθος〉が語られる意義も明確になり、その呈示の仕方制作の側に立つ詩人が制作的な意図をもって教示的に語るものとして理解される。『詩学』において、〈μῦθος〉という言葉は、三つの特徴がそれぞれ先鋭化したものとして扱われている。ゆえに、アリストテレスは〈μῦθος〉という語の外延をプラトンから受け継ぎ、さらにそれを『詩学』において先鋭化して用いているのだと言えるのである。

5. 結

アリストテレスにおける詩作の〈μῦθος〉には、プラトンが用いた〈μῦθος〉という言葉を通して、〈μῦθος〉と

いう語の特徴が先鋭化されてあらわれている。だからこそ、『詩学』における $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ は、単に「神話」「伝説」と同一のものではないし、単なる「物語」と解するわけにもゆかないのである。『詩学』において問われている $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ が「出来事の組み立て」と換言されるほどに、特殊な意味に見受けられるのは、この $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ が $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ の語義が有する特徴を強く先鋭的に示しているからである。詩人の手によって $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ として制作的な意味での虚構性が強調され、有意義な内容を効果的に伝える語り口の面が先鋭化されるとなれば、 $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ のいわば「組み立て」や「構造」の面があらわになるだろう。

しかしながら、『詩学』において中心的に言及されている $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ と「神話」「伝説」などの $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ とが同じの言葉である所以もまた、このような $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ の語義が有する特徴によって理解される。また、語義の特徴に鑑みれば、『詩学』で論じられる $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ は、特に極端な術語化が果たされた概念ではないということも明らかである。語義の有する特徴を示している限り、「神話」「伝説」と訳されるものと『詩学』における $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ との連続性は保たれる。

歴史的な変遷を見てゆくという仕方でも明らかにした $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ の語義の特徴を無視している間は、 $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ を何と訳そうと、『詩学』における $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ 概念は明瞭なものにはなり得ない。しかし、 $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ の語義の特徴を顧慮して、『詩学』における $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ を考えるならば、『詩学』において中心的に問われているものが $\langle \mu\epsilon\theta\omicron\sigma\rangle$ という言葉によってあらわされていることは必然であると言える。今道も註釈において、以下のように述べている。「古典ギリシア語で考えてみれば、神話は $\theta\epsilon\omicron\lambda\omicron\gamma\iota\alpha$ (アリストテレスに於いては神学 $\theta\epsilon\omicron\lambda\omicron\gamma\iota\kappa\eta$ と區別して神々についての語録という意味である) であるし、物語は $\alpha\iota\tau\omicron\varsigma$ や $\delta\iota\alpha\sigma$ であろうし、場合によっては、 $\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$ や $\iota\sigma\tau\omicron\phi\iota\alpha$ でもあるし、伝説ならば $\phi\eta\mu\iota$ とか $\mu\epsilon\theta\omicron\lambda\omicron\gamma\iota\mu\iota\alpha$ であり、筋は $\sigma\upsilon\tau\omicron\tau\omicron\varsigma$ にほかならない。寧ろ $\mu\epsilon\theta\omicron\sigma$ は主題と
思った方がよい場合もあるが、歴史的記録ではなく譚詩的虚構の傾向が強い¹²⁾。『詩学』において問われてい

るところのものを「筋」や「神話」「伝説」「物語」、何と捉えようとも、そう訳されるべき古典ギリシア語は $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ という語以外に色々と挙げられる。にもかかわらず『詩学』において問われているものが $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ という言葉であらわされているのは、それを $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ という言葉でしかあらわし得ないからである。人の手によって作られるという意味での虚構であり、制作的な意図を包摂しているという点で有意義であり、さらに有意義な内容を示すために教示的に語られるものに対して、アリストテレスが $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ という言葉を適用したことは当然であると、 $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ の語義から明らかとなった。

『詩学』において問われているものが $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ という一つの語によって示されていたとしても、ハリウエルや松本・岡、藤沢のように詩作の $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ を「筋」・ $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ 「物語」など、何であろうと、そのような歴史的背景をそなえていない一つの言葉によってあらわすことは困難であると考えられる。また、バイウォーターや今道のように、このような $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ を様々な言葉を連ねてその場その場で臨機応変に訳し分けることは、 $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ という言葉を丁寧に扱っているとは考えられるが、もともと一つの語で示されているものを過不足なく示しているとは言えないだろう。『詩学』における $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ という語をもし訳さなければならぬとするならば今道が言及しているように「ミュートス」として、その上で如何なる意味で用いられているのか随時説明してゆくのが適切なものかもしれない。

『詩学』において $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ は、「形式」とも「内容」とも「形式における内容」ともとれるような多角的に理解されうる概念である。というのは、プラトンの使用した $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ という語の外延を受け継ぎ、歴史的な流れを汲んで、アリストテレスが $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ という語の語義の特徴を『詩学』で先鋭化しているからである。 $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ は「有意義な内容」という特徴が示すように、その「内容」が強調される言葉である。しかし、 $\langle \mu\eta\theta\omicron\varsigma \rangle$ という語が、『詩学』という制作的な場面で用いられることによって、「虚構性」の面が強調され、さらに、それに即し

て構成や呈示の仕方が強く問われるようになり、「教示的な語り口」にも重点が置かれる。このとき *metonymy* における「形式」の面が強調されるのである。歴史的背景をもつ *metonymy* という語が『詩学』で用いられることにより、語義の三つの特徴が先鋭化される。そのために『詩学』での *metonymy* が「形式」とも「内容」ともとることの出来るような「出来事の組み立て」と換言され、*metonymy* が「形式」「内容」「形式における内容」などと捉えられるほどに複雑且つ曖昧な言葉として扱われるのである。

しかし、彼の使った言葉は一つであり、その外延は今すでに明らかである。アリストテレスにとっては、*metonymy* 概念は一つであり、揺るぎなかつたのだらう。しかしながら、そのような歴史的背景をそなえている言葉や、その語義が有する三つの特徴をもつ言葉、同じ外延をもった言葉が、現代の言葉にはないのだ。それは、上記に挙げた様々な訳出の例からも明らかであろう。また、アリストテレスは歴史的な流れを汲んで、『詩学』において *metonymy* という語を用いているのであり、『詩学』においてアリストテレス独特の術語として *metonymy* という語が用いられているわけではない。それにもかかわらず、何故、アリストテレスが詩作に関する実証的な説明の中で、「神話」「伝説」なども示す適用範囲の広い *metonymy* という語を用い得たのかと言えば、それこそ歴史的背景が *metonymy* という語にはあつたからなのである。

〔註〕

(一) 『詩学』で中心的に論じられている *metonymy* に関して、岡・松本、松浦訳ではそれが「筋」と訳されており、ハリウェルやファイフ訳では *plot* と訳されている。今道は *metonymy* を「筋」として、その上で、箇所により補足説明を加えている。また、バイウォーターは諸々の「出来事の組み立て」を意味すると思われる箇所において

Plot, 'Fable or Plot, 'Fables, などの訳し分けをしている。フールマンもまた〈μῦθος〉を様々な訳し分けしているが、アリストテレスが特殊な意味を込めて用いていると考えられる箇所に関しては、'Mythos'、とそのままの形を採用している。しかし、藤沢においては「物語」と訳され、強調の意を込めてか「物語（ミュートス）」となっている箇所もある。ハーディーは 'La fable, と訳している。

- (2) Cf. Halliwell, 1987, p. 94. ハリウェルは、〈μῦθος〉とは決して単なる骨組みではないし、形式として主題から切り離されたものとして考えてはならない、と主張している。〈μῦθος〉とは形式と内容との双方からなるものであり、'dramatic substance (action) in its formal dimension (unity)'、(「形式的規模(統一)における劇的内容(行為)」)であるとされている。

- (3) ここで〈語られたもの〉〈聞かれたもの〉という風に、いわば過去形であらわしたのは、「語られた」「聞かれた」という意味で時間的な過去を強調するためではなく、受動の意味を込めて、語られるべき聞かれるべき「対象」としての意味を強調的に示したからである。

- (4) 〈μῦθος〉と〈eros〉が並列で用いられる例としては *Od.* 4.597, 11.561. また、〈μῦθος〉が明らかに〈語られたもの〉としてある例として、*μῦθον μυθεῖσθην*. Cf. *Od.* 3.140, φέρο μῦθον. Cf. *Il.* 24.598, *Od.* 8.10. 〈聞かれたもの〉としてある例は、*μῦθον ἀκούειν*. Cf. *Il.* 2.200, 8.91, 14.91, 24.632, *Od.* 2.413, 20.389. 以下。

- (5) このような場面で〈μῦθος〉という語が頻繁に用いられていることは、ホメロス用語辞典を見ても明らかである。Cf. Ebeling, 1963. 例えは、独自の意見や特別な要件は、*Il.* 17.694, *Od.* 3.94, 4.324, 8.272. 忠告や助言、命令は *μῦθον* 'εἰρηθεῖσθαι' などの動詞とよく *Il.* 1.33, 1.273, 1.565, 4.412, 20.295, 23.157, *Od.* 17.177. 意見に対する答えは *Il.* 7.406, 9.627, 15.202, *Od.* 17.574. 非難、世責は *Il.* 10.190, 4.323, 16.199. などよく〈μῦθος〉とよく語で示されていると考えられる。

- (6) Hdt. 2.45.1. <evrhng>とは本来、善良な、率直な、正直な、などを意味すると考えられるが、ここでは諸訳者の訳語も検討し、単純な、愚かな、馬鹿げた、という傾向の意味を採用した。ゴッドリーは <evrhng> を 'foolish' と訳し、松平は「愚かしいもの」と訳している。
- (7) Cf. Th. 1.22.4. <ubasing> は <ubog> の形容詞の形である。<ubasing> は「伝説的な」「架空の」などと訳される。<ubasing> を <ubog> の同族語とみなし、この語に関しても扱うことにする。<ubog> という語を考察する上で手掛かりとなるであろう。
- (8) たとえ <ubog> が「偽り」のものであったとしても、敵や友人が悪いことをしようとしているときに、それを止めさせるための薬になりうるのである。Cf. R. 382C6-D3, 389B2-5.
- (9) 『バイン』にちるよ、<ubog> を信じる理由に関しては、「なぜなら、この危険は美しいからである (καλός γὰρ ὁ κίνδυνος)」(114D6)と言及されている。しかし、この説明はほとんど無根拠であるとも言える。
- (10) <ubog> は「見ることがなくなっても起こりつつあることを聞くだけで恐れや哀れみを感じられるように組み立てられなければならない」と規定されている (145B3-6)。
- (11) 戯曲内では、無論、登場人物同士による対話形式で話が展開するが、語り手対聞き手、詩人対観客で考えた場合、その間に交わられる話は一方的に教示の話で語り手から話される。
- (12) 今道 1972, p. 199.

参考文献

- Allen, T. W., Monro, D. B. *Homeri Opera*. I-IV. Oxford Classical Text. Oxford: Oxford University Press, 1971-1974.

- Burnet, J. *Platonis Opera*. II-V. Oxford Classical Text. Oxford: Oxford University Press, 1953-1989.
- Bywater, I. *Aristotle on the Art of Poetry*. Oxford: Clarendon Press, 1920.
- Duke, E., Hicken, W. F., Nicoll, W. S. M., Robinson, D. B., Strackan, J. C. G. *Platonis Opera*. I. Oxford Classical Text. Oxford: Oxford University Press, 1995.
- Ebeling, H. *Lexicon Homericum*. Hildesheim, Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 1963.
- Fuhrmann, M., *Aristoteles, Poetik*, Stuttgart, 1987.
- Fyfe, W. H. *Aristotle, the Poetics*. Loeb Classical Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1927.
- Godley, A. D. *Herodotus*. I. Loeb Classical Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1960.
- Halliwel, S. *The Poetics of Aristotle translation and commentary*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1987.
- Halliwel, S. *Aristotle, the Poetics*. Loeb Classical Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1995.
- Hardy, J. *Aristote Poétique*. Collection des Universis de France. Paris: Socit d'Édition "LES BELLES LETTRES", 1979.
- House, H. *Aristotle's Poetics*. London: Rupert Hart-Davis, 1956.
- Hude, C. *Herodoti Historiae*. I. Oxford Classical Text. Oxford: Oxford University Press, 1972.
- Jones, H. S. *Thucydidis Historiae*. Oxford Classical Text. Oxford: Oxford University Press, 1953.
- Kassel, R. *Aristotelis De Arte Poetica Liber*. Oxford Classical Text. Oxford: Oxford University Press, 1988.

今道友信訳 『アリストテレス全集17 詩学』、岩波書店、一九七二。

藤沢令夫訳 『世界の名著8 アリストテレス詩学』、岩波書店、一九七八。

松浦嘉一訳 『アリストテレス 詩学』、岩波文庫、岩波書店、一九六二。

松平千秋訳 『ヘロドトス 歴史(上)』、岩波文庫、岩波書店、一九七一。

松本仁助・岡道男訳 『アリストテレス詩学』、岩波文庫、岩波書店、一九九八。